

JSPSボン研究連絡センター 2012 年度第 1 四半期活動報告 (2012 年 4 月～6 月)

< 目 次 >

1 2012 年 4 月～6 月の主な活動	…p 1
(1) キエフ工科大学にて JSPS 事業説明会を開催	
(2) 第 17 回日独学術シンポジウムを開催	
(3) JSPS サマー・プログラム プレオリエンテーションを開催	
(4) ボン大学主催留学フェアに参加	
(5) ギーセン大学・マールブルク大学肺研究センター(UGMLC) 主催キャリア開発シンポジウムに出席	
(6) アレクサンダー・フォン・フンボルト財団年次総会に出席	
2 2012 年 7 月以降の主な行事予定	…p 10
3 関係機関について	…p 10
4 当センターからのお知らせ	…p 11
5 センター長雑感	…p11

1 2012 年 4 月～6 月の主な活動

(1) キエフ工科大学にて JSPS 事業説明会を開催

日時:2012 年 4 月 24 日

場所:キエフ工科大学(ウクライナ国キエフ市)

キエフ工科大学(KPI)にて JSPS 事業説明会を開催した。KPI だけでなくウクライナ国立大学など近隣の大学からの来場者もあり、当日は研究者やポスドク、学生を中心に、80 名程度の来場があった。説明会に先立ち、KPI の Zgurovsky 学長、在ウクライナ日本国大使館の坂田大使、ウクライナ国外務省の Aleksandruk 氏、SFRR の Kyiak 氏からの挨拶があった。

挨拶に続いて、小平センター長が講演を行った。日本についての知識の少ない参加者も少なくないと思われたことから、JSPS の事業説明だけでなく、日本についての地政学的な説明、文部科学省や JASSO、JST 及び日本の研究機関や大学の紹介なども行った。JSPS については、JSPS の概要と、ウクライナの研究者も申請することのできる外国人特別研究員事業や今後募集が予定されている国を特定しない二国間交流事業を中心に説明をした。講演後に質疑応答の時間が取られ、渡日に関する具体的な質問を含め、5、6 件の質問が寄せられた。出席者全員に、講演用パワーポイント資料と JSPS フェローシップ一覧のリーフレ

ットを配布した。小平センター長は英語で講演を行い、在ウクライナ日本国大使館の判断により、通訳者が適宜ウクライナ語に通訳した。

説明会前後には、在ウクライナ日本国大使館、ウクライナ日本センターを訪問し、KPI の見学の時間も設けられた。



会場の様子

左から坂田大使、小平センター長、中川副センター長、
ウクライナ日本センター水谷センター長

小平センター長による JSPS 事業説明講演の様子



質疑応答の様子(左は小平センター長、右は中川副センター長)

(2) 第 17 回日独学術シンポジウムを開催

日時:2012 年 5 月 11 日～12 日

場所:ミュンスター大学(ミュンスター市)

当センターでは例年、JSPS ドイツ同窓会と共催で「日独学術シンポジウム」を開催しており、今回で 17 回目となる。シンポジウムのテーマは同窓会員からの希望を参考に決めているが、自然災害については過去から希望が多く、2011 年 3 月に発生した東日本大震災により関心が高まっていることもあったため、今回のテーマは「自然災害:その影響とマネジメント」とした。本シンポジウムには、同窓会員や元 JSPS フェローを中心に、170 名程度の参加申し込みがあった。

シンポジウムは、ドイツの地質学者アンドレアス・キュッパース氏 (Andreas Küppers) による、日本が置かれた地理的特徴に即した自然災害とエネルギー源についての一般的概観を導入講演として始まり、続いて法学、精神医学、都市計画について、それぞれ日独各 1 名の研究者による講演が行われた。

法学セッションでは、防災・補償・復興などの様々な局面で、個人の権利と行政体の指揮権との関係が問われることが浮き彫りにされ、憲法と法規・行政指導の対立問題点が論じられた。法律上、都市計画ではドイツに比べ日本の行政体の権限が弱く、防災・災害復興の方針決定等には法的課題の多い様子が伝えられた。

精神医学のセッションでは、精神ケアの観点から講演者が多くの統計データを示して、精神的被害が災害後の時間経過の中で変化していく類型に幾種類もあり、後年になってから病状が出る場合もあること、また国民性や文化背景によって発症の率の異なることが示された。日本人は耐性が比較的強く、昨年の大災害でも自制心を保ち忍耐強く復興に向かおうとしていると評価された。

都市計画のセッションでは、ドイツ側の講演者が首都圏の防災対策や被害予測の現状を詳細に報告した。しかし東京の現状を知る参加者からは、早急な機能分散無しには「焼け石に水」ではないかという懸念が表明された。日本側の講演者は、神戸・淡路大震災後の地域復興、並びにそれに学んだ諸都市の防災対策を紹介し、さらに東日本大震災後で壊滅的被害を受けた岩手県大槌町の復旧・復興計画形成過程の現状を詳しく報告した。留意すべき重要事項の第一に「住民の心の結集」が挙げられていた。

以上の学術セッションに加えて、日独学術交流と JSPS ドイツ同窓会の役割というテーマで、4 人のパネラーによるパネル・ディスカッションが行われた。日独双方向の幅広い情報伝達や広報への要望が出る一方、優れた研究者による人から人への着実なネットワーク作りの重要性も指摘された。

当シンポジウムのプログラム及び講師の CV、講演のアブストラクト、講演で使われたパワーポイント資料については、当センターホームページ(<http://www.jsps-bonn.de/index.php?id=1411>)に掲載している。



ハインリヒ・メンクハウス JSPS ドイツ同窓会長による挨拶



JSPS 里見昭彦人物交流課長による挨拶



学術セッションの様子



パネルディスカッションの様子



集合写真

5 月 11 日の夕食会では、JSPS ドイツ同窓会から、田中靖郎前 JSPS ボンセンター長へ JSPS ドイツ同窓会「名誉会員」資格授与式が行われた。田中前センター長の同窓会活動への理解と貢献及びご自身の日独学術交流への貢献を称えての授与で、名誉会員となるのは同窓会設立当時に JSPS ボンセンター長であった新井榮一元センター長に続いて 2 人目である。



夕食会開会の挨拶をする小平センター長



同窓会「名誉会員」資格を授与され挨拶する田中前センター長

(3) JSPS サマー・プログラム プレオリエンテーション開催

日時: 2012 年 5 月 16 日

場所: グスタフ・シュトレゼマン会議場(ボン市)

ボン研究連絡センターでは、JSPS サマー・プログラムに採用された渡日間近の若手研究者に対し、日本での研究を有意義に開始してもらうとともに、参加者同士の親睦を深めてもらうことを目的とした渡日前オリエンテーションを毎年ボンで開催している。本年度は採用者 15 名のうち 12 名が参加した。

当日は小平センター長の挨拶で始まり、続いて本プログラム参加者の推薦機関であるドイツ学術交流会(DAAD)のカーリン・メラー(Karin Möller)氏による挨拶及びDAADの日独交流事業についての説明が行なわれた。その後、参加者自己紹介、吉永国際協力員からのサマー・プログラム参加についての説明、中川副センター長からのサマープログラム終了後に申請可能なJSPSフェローシップの紹介が行なわれた。その後、集合写真撮影とコーヒープレイクをはさみ、昨年度のサマー・プログラム参加者ユリア・ヴァルターマン(Julia Waltermann)氏とウルリッヒ・ヘルマン(Ulrich Hörmann)氏による体験発表及び質疑応答が行われた。体験発表では、日本での研究やその成果、日本文化や生活情報等の具体的な内容が、数多くの写真とともに紹介された。続いて、JSPSドイツ同窓会役員ザビーネ・ガンター-リヒター(Sabine Ganter-Richter)氏から同窓会の紹介があり、質疑応答が行われた。

JSPS サマー・プログラムは、日本から遠く離れた欧米の若手研究者に対して日本での生活体験や研究機会を提供することにより、渡日に対するバリアを取り除き、その後により長期の渡日プログラムへの参加等に向く効果が期待されている。そのため、JSPS 側からの説明は、外国人特別研究員事業などの長期渡日プログラムの紹介に重点を置いた。DAAD からのプレゼンテーションも同様に、DAAD が関与している長期渡日プログラムの紹介が中心であった。本プログラムは約2ヶ月間という短期間で実施されるが、各参加者が事前に長期的な計画をもって参加することにより、将来につながる発展性のある取り組みが期待される。そのためにも、本オリエンテーションにおいて、プログラムの意義やその後の進路を示すことは大変重要な意味を持っているといえる。

< 関連 URL >

JSPSサマー・プログラムについて

JSPSホームページ <http://www.jsps.go.jp/j-summer/index.html>

ドイツ国内でのJSPSサマー・プログラムへの申請について

DAADホームページ内“Stipendien Datenbank”

(http://www.daad.de/ausland/foerderungsmoeglichkeiten/stipendiendatenbank/00_658.de.html)

で、“Zielland”(目的地)を“Japan“として検索



小平センター長による挨拶



吉永国際協力員によるサマー・プログラムの説明



ユリア・ヴァルターマン氏による体験発表



ウルリッヒ・ヘルマン氏による体験発表



参加者集合写真

(4)ボン大学主催留学フェアに参加

日時: 2012 年 5 月 23 日

場所:ボン大学(ボン市)

ボン大学国際課主催の留学フェア“*Auslandsstudienmesse*“が開催され、当センターからは中川副センター長、シュルツェ職員、吉永国際協力員が参加した。会場では、各国の関係機関やボン大学の学生サークルがブースを出展し、来場者に対して留学や国外インターンシップに関する情報を提供した。日本からは、ボン市内に事務所を設置している早稲田大学(グローバル 30 共同利用事務所)及び筑波大学も参加した。

ブースでの情報提供と並行して、隣接する講義室にて、各国への留学等に関する情報を提供する講演が行われた。日本に関しては、当センターの中川副センター長が奨学金やフェローシップについて、早稲田大学ヨーロッパセンターが同大及びグローバル 30 について、それぞれ 15 分の講演を行った。中川副センター長の講演の際に、出席者の所属課程について、出席者に挙手を求めて確認したところ、20 名程度がバチラー、2 名がマスター、1 名がドクターという内訳であった。例年の状況から予想されたことであるが、出席者の大半が JSPS フェローシップの対象とならない学生であったため、JSPS フェローシップに関する情報に限らず、日本留学のための奨学金などの一般的な情報提供を行った。

過去にボン大学の留学フェアで講演を行った際には、講演を聞きに来た人の数が 10 名前後と少ないことも少なくなかったが、今年度は、例年よりも多くの学生が講演を聞きに来ていた。出席者が増加した理由についてボン大学の担当者に話を聞いたところ、2011 年 12 月に同大学にて開催した早稲田大学主催の留学フェアの効果も大きいのではないかとのことであった。

ブースを訪れる学生の多くは日本留学に関する全般的な情報を求めているが、今回参加した日本関係の機関は当センターと早稲田大学及び筑波大学のみであり、残念ながら奨学金や渡日プログラムに関する全般的な情報を提供できる体制になっていない。他大学での留学フェアへの参加の際を含め、このようなイベントに参加すると、来場者が不満を残して帰っている様子が見受けられることが少くない。2011 年の「日独 150 周年」関連の各種広報イベントの効果もあつてか、ドイツの学生の間では、学部レベル等の早い段階から渡日に対する関心が高まっている印象を受け、日本学生支援機構(JASSO)などの他機関との連携の必要性を感じる。

< 関連 URL >

ボン大学ホームページ

<http://www3.uni-bonn.de/studium/studium-und-praktikum-im-ausland/veranstaltungsprogramm/23.-mai-3.-auslandsstudienmesse>



JSPS ボン研究連絡センターのブース(左 中川副センター長、右 シュルツェ職員)



中川副センター長による講演



会場の様子

(5) ギーセン大学・マールブルク大学肺研究センター(UGMLC)主催キャリア開発シンポジウムに出席

日時:2012 年 6 月 11 日

場所:ホテルブルクシュタウフェンベルク(シュタウフェンベルク市)

中川副センター長が標記シンポジウムに出席し、日本での研究滞在のための外国人学生、研究者向けの奨学金やフェローシップについての講演を行った。このシンポジウムはギーセン大学・マールブルク大学肺研究センター(UGMLC)が、主に大学院生やポスドクを対象として、将来の就職機会についての情報提供を行うために開催したものである。当日は UGMLC や近隣の大学から大学院生、ポスドクを中心に、50 名程度が出席していた。主催者側に聞いたところ、同研究センターの大学院生やポスドクのうち、臨床に進む者と研究に進む者はおそらく半々程度で、医学ではなく生物学の研究者を目指す者も少なくないという。

当センター以外には、ドイツ研究振興協会(DFG)、ドイツ学術交流会(DAAD)、フンボルト財団(AvH)、ドイツ・イスラエル科学研究開発財団(German-Israeli Foundation for Scientific Research and

Development)などが参加し、それぞれの機関のフェローシップや研究費を紹介する講演を行っていた。

<関連 URL>

UGMLC 主催キャリア開発シンポジウムホームページ

<http://www.uni-giessen.de/cms/fbz/fb11/forschung/graduierte/ugmlc/symposia/funding>

(6) アレクサンダー・フォン・フンボルト財団(AvH)年次総会に出席

日時:2012 年 6 月 19 日～20 日

場所:ドイツ連邦大統領公邸、ベルリン自由大学、シャーロットンブルク城(ベルリン市)

アレクサンダー・フォン・フンボルト財団(AvH)のフェローシップを受けてドイツに研究滞在している74ヶ国からの626人の研究者を集め、AvH年次総会が開催された。当センターからは、AvHからの招待により、小平センター長夫妻が出席した。

総会は6月19日に、「フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞」(Philipp Franz von Siebold-Preis)の授賞式に始まり、ガウク大統領から2012年度の受賞者である大阪大学法学部 高田篤教授に賞が贈られた。授賞式には、ドイツ側からは連邦教育研究省(BMBF)及び外務省代表者、AvH会長夫妻、ドイツ研究振興協会(DFG)会長夫妻が、日本側からは在ドイツ日本国大使館 中根猛大使夫妻及び小平センター長夫妻が陪席した。「フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞」は、日本とドイツにおける文化及び社会のよりよい相互理解に貢献し、学問上すぐれた業績をあげた日本人研究者に授与される賞であり、1979年より毎年1名が受賞している。賞金は5万ユーロであり、受賞者はドイツにおける1年間の研究滞在に招待される。



フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞授賞式で
ガウク大統領による出迎えを受ける小平センター長
(Humboldt-Stiftung/[David Ausserhofer]))

引き続き、大統領公邸内の庭園にて、総会の全参加者と同伴家族を対象に大統領主催のレセプションが開かれた。大統領は「このように244人ものお子さんを伴って、多くの方々がドイツに滞在し、自由に研究されていることを誇りに思います」などと心のこもった挨拶をした後、1時間半に亘って個々の研究者やその家族と歓談した。会場には例年、子どもが遊べる場所が別途用意されている。日本人研究者は10数名が参加していた。

続く20日は、次の日程で式典が開かれた。

- ① 男声4重合唱(ドイツ歌曲)

- ② ベルリン自由大学長アルト(Alt)教授の歓迎の辞、シュヴァルツ(Schwarz)AvH 会長の挨拶。挨拶では「時代を動かすのは、原理ではなく、人である」というアレクサンダー・フォン・フンボルトの言葉を引用して、総会に集った人々を称えた。
- ③ 記念講演:ベルリン自由大学ツィーグラー(Ziegler)教授「大砲でスズメを撃つー純粋数学と応用ー」
- ④ 男性 4 重合唱(世界の現代歌曲)
- ⑤ 研究報告:イタリアとアメリカからの研究者各 1 名
- ⑥ 同窓会賞授与式:カメルーン、ナイジェリア、アメリカの各グループに、同窓会組織化への促進支援
- ⑦ ホール・ホワイエでの大レセプション(フンボルトフェローと同伴家族は遊覧船上での昼食会へ)
- ⑧ 夕食会
- ⑨ シャーロットテンブルク城館にてフンボルト研究賞授与式

シュヴァルツ AvH 会長は、ニュートンの「浜辺で珍しい貝を見つけて拾う少年」の詩を引用して、自由な好奇心の発露の重要性を指摘し、優れた受賞対象研究者の更なる探究心への期待を表明する挨拶をした。弦楽二重奏(古典楽曲)に続き、受賞式が行われた。2012 年度は 32 人が受賞し、受賞者は、アメリカで研究している研究者が大多数を占めた(国籍は多様)。日本人では自然科学研究機構分子科学研究所 大森賢治教授と京都大学理学研究科 丸岡啓二教授の 2 名が受賞した。

フンボルト研究賞は優秀な外国人研究者をドイツの特定の受け入れ研究者のもとへ招へいするためのもので、大勢の参加者が見守る席上で同賞の授賞式を行うのは、多忙な一流の研究者のドイツでの研究滞在を実現させるための工夫である。

<関連 URL>

AvH ホームページ

<http://www.humboldt-foundation.de/web/press-release-2012-18.html>

2 2012 年 7 月以降の主な行事予定

- 09 月 25 日(火) JSPS ボン研究連絡センター年次活動報告会“JSPS Abend“(於ボン)
- 11 月 16 日(金) 日本の大学及び渡日プログラムの紹介イベント“Forschung und Studium in Japan“(於ミュンヘン)
- 01 月 30 日(水) 第 9 回日独学術コロキウム(於カールスルーエ)

3 関係機関について

ドイツ研究振興協会(DFG)

マティアス・クライナー会長 (Prof. Dr. Matthias Kleiner) の任期が 2012 年 12 月 31 日で満了しますが、後任会長が 2012 年 7 月 4 日の DFG 年次総会にて選出されました。後任は 2006 年から 2011 年まで学術評議会 (Wissenschaftsrat) の会長を務めたドイツ文学者のペーター・シュトロースナイダー氏 (Prof. Dr. Peter Strohschneider) で、現在はシニアリサーチフェローとして Freiburg Institute for Advanced Studies に所属しています。

< 関連 URL >

DFG ホームページ

http://www.dfg.de/en/service/press/press_releases/2012/press_release_no.31/index.html

4 当センターからのお知らせ

2010 年 8 月 1 日より当センターで副センター長として勤務し、本活動報告の執筆も担当していた中川正志が 2012 年 7 月 25 日に任期満了により帰国します。後任として、東京工業大学から大川晴美さんを迎えます。

中川は 2012 年 8 月 1 日より、新潟大学研究支援部国際課にて勤務します。

5 センター長雑感

新年度、吉永国際協力員が着任、ただちに実戦担当に。毎度のことながら事務職員の順応力には感心する。4 月にウクライナに事業説明に行った。言語・文化ギャップがあるが、大きな可能性を持つ地域で、開発研究と研究者・学生交流に関心が高いようだ。東ヨーロッパ・旧ソ連圏への対応の大切さと難しさを知る。ドイツ研究振興協会 (DFG) のエクセレンス・イニシアティブ第二期の採択校が決まった。最近、このような上部主導の超重点支援政策に対し、一部で批判が高まっている。過激過ぎる資金獲得序列化競争が学問の自由な発展を阻害し、長期的には国家の損失に繋がるという視点である。高等教育にも害ありとする意見もある。わが国で理系人材育成に使われる「ノーベル賞○○人を目指せ」という科学技術スローガンも似たような所が無い。賞は結果として与えられるもので目指すべきものではない。裾野まで広がった大きな山容を作る人材群が在ってこそ、頂点を極めうる人が出るのではない。個性を無視した序列化は慎むべきだろう。

ドイツでの大学改革論議が進む中、日本でも国立大学次期改革ビジョンの策定が予告された。発表された構想概要は、国立大学法人化の妥当な帰結の一つだと思われる。戦後営々と築いた資産を活かしながら、国立大学法人の意義とプレゼンスを高めよう。

小平桂一 2012.6.29



ぼんぼん時計第 36 号

日本学術振興会ボン研究連絡センター

JSPS Bonn Office

Ahrstrasse 58, D-53175 Bonn (事務所住所)

Postfach 20 14 48, D-53144 Bonn (郵便物用)

Phone +49 (0) 228-375050 Fax +49 (0) 228-957777

www.jsps-bonn.de